

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			社会学 研究科	社会学 専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	社会学部・教授		奥村 隆 印		
自然・人文の別	自然 ・ (人文)		個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名	
研究課題名	「仲介者」から読み解く開発援助—NGOに参入するイエメン女性を事例として—				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科 社会学専攻6年		兼川 千春 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

開発援助を研究対象とする開発研究は1950年代以降「ドナー」の視点から近代化論に依拠する経済学を中心に進められてきた。1970年代以降、従属理論の台頭とも呼応して「受益者」の視点から開発援助を捉えなおす研究が主に人類学から提起されたが、開発援助を構成するアクターは「ドナー」と「受益者」だけではない。本研究は、特に1990年代以降の社会開発で「ドナー」と「受益者」の間に不可欠とみなされるようになった「仲介者」に着目し、「仲介者」に関する先行研究が主として「ドナー」の視点に依拠した規範的な議論に偏重していたことを指摘したうえで、「仲介者」の視点を実証的に解明することを研究の目的と設定した。具体的には、中東の「最貧国」イエメンのなかでも「最貧困層」とみなされる人々の「仲介者」となった女性たちを事例とし、彼女たちが開発援助に関わる動機と彼女たちが介在するがゆえの問題点を明らかにしようと試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[開発援助] [仲介者] [イエメン女性]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究の目的

本研究の目的は、社会開発に不可欠な存在とみなされる「仲介者」、なかでもローカルな仲介者に焦点をあて、その実態の解明を通して、「仲介者」を介した社会開発の問題点と今後の課題を考察することである。

本研究では、これまでの研究成果にもとづき以下の問いを設定した。

- ①「仲介者」はなぜ開発援助に関与するのか。
- ②「仲介者」が「貧困層」を対象に企画した開発援助はなぜうまくいかないのか。

2. 研究の方法

事例として、国連の基準における後発開発途上国であり中東イスラーム地域の最貧国の1つであるイエメンで、最貧困層といわれる「アフダーム」を対象とした社会開発をとりあげ、その「仲介者」となった女性たち8名に、ライフストーリーの手法をとり入れた半構造型インタビューを実施した。この8名を選んだのは、先行調査において「アフダーム」の「仲介者」として活動したことがある総勢21名を対象にアンケート調査を実施した結果、それぞれ類型的な事例として妥当と判断したからである。また、特に②の問いを解明するため、「受益者」となった「アフダーム」3名にも「仲介者」や「ドナー」の援助について同様のインタビューを実施した。インタビューはすべて録音し、トランスクリプトを作成した。なお、インタビューは英語を解する者に対しては筆者が英語で行い、アラビア語のみ解する者に対しては英語/アラビア語の通訳を同伴して行ったので、トランスクリプトはすべて英語である。インタビュー時間は個人差があるが、おおよそ2~3時間であった。

3. 研究の成果

立教SFRの助成による調査の結果、2つの問いに対する答として、以下のような成果を得た。

①「仲介者」はなぜ開発援助に関与するのか。

2001年1月に実施した先行調査において、「アフダーム」に関わる「仲介者」の動機を「社会奉仕」「所得増大」「教師」「自立」という4つのキーワードで分類できることが明らかになっていたが、今回のインタビューはそれぞれのキーワードが1990年代以降のイエメン社会に生きる高学歴女性たちにどのような意味をもつのかを具体的に解明するのに非常に役立った。以下、この4つのキーワードに沿って、成果を明らかにしたい。

第1に、「仲介者」はすべて「アフダーム」の援助に「たまたま」関わるようになっただけで、それを「社会奉仕」、端的に言えば「貧しい人々を助ける良い行い」「ボランティア」「慈善事業」と捉えていた。あらかじめ「開発援助」という概念を知っており、それに興味をもって関与し始めた仲介者はほとんどいなかった。「ドナー」は「開発援助」を「慈善事業」と明確に異なるものと位置づけ、ローカルな「仲介者」にもその理念や方法論の共有を求め、キャパシティ・ビルディングと称してさまざまな研修を行ってきたが、そのような「ドナー」の働きかけにもかかわらず、本事例に関するかぎり、認識を変えた仲介者は少数であったことが明らかとなった。「ドナー」の主要言語である英語を解し、その資金によって留学し「開発援助」を学ぶことができたごく一部の仲介者だけがドナーの創出した「開発援助」を理解するようになったが、それ以外の仲介者にとって、「アフダーム」への援助は依然として「イスラームに基づく貧者救済」の理念の枠組みのなかで理解されていた。

第2に、以上のような認識を言明することは、「家計を支えるのは男性である」「女性はなるべく早く結婚し家庭に入って母親になるべきである」というイエメン社会の支配的ジェンダー規範に反し、「所得増大」の必要性から家の外で働かなければならない経済的にゆとりのない高学歴女性たちとその家族に好都合であることが明らかとなった。イエメンでは20世紀半ばから、慈善事業に限っては、女性が家の外に出ることが公認されてきたため、家計への貢献を求められた女性たちが「アフダーム」の援助という「イスラームに基づく貧者救済」の理念に適合的な活動によって収入を得ることは、当の女性が宗教的に敬虔であるがゆえに家の外に出ていることを内外に示せるだけでなく、家族の男性に家計を支える能力がないという「不名誉」を隠蔽する機能をもっていた。

第3に、援助対象が宗教的に好ましいだけでなく、援助のあり方も宗教的に評価されるものだった。仲介者たちはみなNGOで「アフダーム」の援助に関与していたが、「ドナー」が「アフダーム」のなかでも「女性」を対象とした「保健」や「教育」分野の援助を好んだことから、特に「教師」の需要が高かった。「アフダーム」の援助に関与する仲介者も「教師」として関与しはじめた女性たちが多かった。「アフダーム」のように就学率も識字率も低い貧者にクルアーンの言語であるアラビア語を教え、クルアーンについて教えることは、敬虔なイスラーム教徒を増やすことであり、宗教的に高く評価される。さらに、イエメンでは教師は規範的にも「女性に最もふさわしい」職業である。女性の教師は女性であることが望ましいため、職場が女性ばかりとなるからである。「アフダーム」の援助においても対象は女性であったため、NGOは必然的に「女性ばかりの職場」となり、送迎バスのあるNGOまであった。このような職場で教師として働くのであれば、家の外で働いているといっても、女性と家族の「名誉」は維持される、むしろその評価を高めることができたのである。

最後に、「イスラームに基づく貧者救済」の理念を言明することは、「自立」を求める女性たちにとっても戦略的に有効であったことが明らかとなった。ここで彼女たちのいう「自立」とは、端的にいえば自分の人生／生活において自己決定権をもつことであり、そのような場を確保することであると考えられる。「家と学校の往復だけ」であっても、就学によって家の外に出ることは彼女たちに自己決定権を行使する場を提供した。しかし、大学卒業後は自分で就職先をみつけないかぎり、家に留まり親の決めた結婚相手を待つという選択肢しかない。引き続き家の外に出て自己決定権を行使する場を確保したい。「広い世界をみ」、「自分の可能性を探したい」。しかし、そのために自分や家族の「名誉」が傷つけられることがあってはならない。このように、自分と家族の「名誉」を維持しつつ家の外に出たいという葛藤のなかで、「イスラームに基づく貧者救済」の理念にかなった慈善活動なら彼女たちの人生／生活に決定権をもつ「父親も宗教的に反対できない」ことに気づき、「アフダーム」の援助に関与することによって矛盾する願望を実現したことが確認された。

以上のことから明らかになるのは、仲介者が「アフダーム」という貧困層の福祉の向上や選択肢の拡大というより、むしろ自分自身のそのために開発援助に関与していたという点であろう。そして、もう1つ、今回の調査で明確になった点は、動機はどうか「アフダーム」の援助に関わることによって彼女たちが「自立的」である楽しさに目覚め、「自分の居場所」を見出したという点である。仲介者たちは「イエメン女性には自立的である自由がない」「家では何をすべきか常に指示されて育つため依存的になる」と語ったが、開発援助に関与することは彼女たちに「責任を所有する」楽しさや「自己決定権をもつ」充足感を教え、彼女たちが支配的ジェンダー規範から距離をとる契機を提供した。もちろん彼女たちはみな大学進学者であるという点で従来の支配的ジェンダー規範から逸脱する存在だが、開発援助に関与することによってさらにその逸脱は助長された。個人差はあれ、イエメン社会の支配的ジェンダー規範に居心地の悪さを感じてきた仲介者にとって、開発援助に携わることはイエメン社会にありながら支配的ジェンダー規範に束縛されず自分らしく能力を発揮でき、それを評価される居心地の良い場となっていたのである。それでも彼女たちは支配的規範に挑戦するのではなく自身の逸脱的行為をイスラームによって正当化しつつ、規範と折り合いをつけながら「自立的」であろうとしていたといえるだろう。

② 「仲介者」が「貧困層」を対象に企画した開発援助はなぜうまくいかないのか。

本研究では、この問いを「仲介者」が介在するがゆえの問題点と読み替えて答を求めてみた。まず、①の結果をふまれば、②の問いの答は「中間層出身の仲介者は貧困層にさほど関心がなく、その関心の所在は自分自身にあったから」と結論づけることができるだろう。開発援助の用語を適用するなら、「貧困層」を対象とした開発援助は「貧困層」よりむしろ「仲介者」をエンパワーする場となっていたのである。しかし、それだけではないだろう。そこで本研究では、仲介者を「開発援助の構造」と「ローカルな構造」、この2つの構造が交差する地点にいる存在と考え、仲介者が介在するがゆえの問題点を考察した。紙幅の制約のため、ここでは主要なもののみ記述する。

まず、仲介者が「開発援助の構造」に巻き込まれているがゆえの最大の問題点は、仲介者がみな NGO に属しており、活動許可の権限をもつイエメン政府と資金提供者であるドナーの意向に常に配慮する必要があったという点だろう。特に「アフダーム」の援助に関与していた NGO はみな自己資金に乏しく、組織の基盤が脆弱で、仲介者は常に不慣れた資金調達必要性に迫られていた。そのことが、仲介者の関心を、貧困層の構造的課題やニーズを把握することより政府やドナーの意向に配慮して円滑に資金調達をすることに振りむけていた。そして、それが結果的に、貧困層にとって最も切実な課題には取り組まない援助を産出していたと考える。

次に、仲介者が「ローカルな構造」に巻き込まれているがゆえの問題点を2点のみ指摘したい。第1に、女性ゆえの問題点である。調査当時、「アフダーム」の援助に関与していた「仲介者」はすべて若い女性であった。イスラームの規範に適う「女性にふさわしい」慈善事業という認識で「アフダーム」の援助に関わりはじめた仲介者は、以後もその認識で活動に従事した。したがって、彼女たちは「アフダーム」に対する援助の成果より「アフダーム」を援助するという行為そのものを価値づけ、「アフダーム」の構造的課題に対処することができなかった。これはまた、彼女たちが特権的な「高学歴」であるとはいえ、イエメン社会では「女性」であるかぎり保護すべき「弱者」とみなされるというアンビバレントな立場から、社会や政府で決定権をもつ男性に働きかけることが困難だった点にも起因する。第2に、階層ゆえの問題点がある。仲介者の大半は経済的には中間層で、社会的にはイエメン社会の主流をなす「部族民」であった。一方、「アフダーム」は非部族民で、イエメンでは差別ゆえに「最貧困層」からの脱却が困難な人々といえ、両者の接点は開発援助以外ではほとんどなかった。イエメン生まれイエメン育ちのイスラーム教徒だがパキスタン国籍の仲介者は、ローカルな仲介者を「非常に聡明で慈悲深い者でさえ、アフダームに対するレイシズムに囚われている」と語り、仲介者が「ローカルな構造」に巻き込まれているがゆえに無意識のうちに内在させている差別感情を指摘した。このような階層ゆえの断絶が、仲介者に「アフダーム」の構造的課題の把握を妨げていたと考えられるが、この点についての解明は今後の課題としたい。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④ 第80回日本社会学会 (2007年11月18日 於: 関東学院大学)
国際・エリアスタディ(3)「開発・援助セッション」報告
兼川千春「開発援助プロジェクトにおける仲介者」